

フィリピン研修を終えて

京都大学文学部 3 回生

相築理穂

一週間フィリピンに滞在し、CFO をはじめとする様々な移民に関わる機関、あるいはフィリピンの社会そのものに実際に足を踏み入れることができたことは貴重な経験であり、そのどれもが印象深い出来事ばかりであった。

貧困集落を見学したことはとても印象に残っている。テレビなどの報道を通し、ストリートチルドレンなどの存在は知っていたが、実際に集落に足を踏み入れると想像を絶する狭さや暗さ、そして臭いといったものに衝撃を受けた。その日の午前中にアジア開発銀行を見学していたため、まるで地続きの世界とは思えない風景のギャップに驚いた。子供たちが私たちのところに駆け寄ってきて人懐っこく話しかけてくる、そのエネルギーはすさまじいものだった。彼らをたくましく生きている、と形容することもできるが、その日の食べ物を手に入れるのに精いっぱいであり、彼らにとってはそれが当たり前であることを思うと、何とも言えない気持ちになった。少なくともそのような生活は、「満ち足りている」とは言えないだろう。彼らは何を思って毎日を生きているのか、そのようなことを考える隙もないほど飢えているのではないか。それに比べると、施設で保護されていた子供たちは将来の夢を語り、希望を持っていたなあとと思う。だが全員を保護することは到底無理であるし、やみくもに富を分け与えればいいわけでもない。自分ができることは、与えられた機会を精いっぱい享受すること、というのがひとまずの結論である。

フィリピン大学では、フィリピンの若者がどのように日本を見ているかがわかり、非常に有意義であった。アジアの国々にとっての日本は悪の権化としてとらえられているに違いないという認識を改めさせられた。特に、日米の関係を冷静にとらえていることに驚いた。フィリピンもスペイン・アメリカの支配下に置かれてきたから、という部分もあるかもしれない、もしかしたらほかのアジアの国も、存外に理解してくれているのかもしれないと思った。日本のサブカルチャー及びソフトパワーに興味を持ち日本研究を始めた学生が多いと予想はしていたが、予想をはるかに超える熱狂的なクール・ジャパンファンが多く驚いた。漫画・アニメ・ジャニーズだけでなく、草食系男子やK-POPといったごく最近の話題まで把握しているところにはただただ感服した。また、米田教授も私たちのボランティア活動に非常に理解を示していただき、大きな励ましとなった。

そして何より、CFO での活動は貴重な経験だった。日本にいる間にも、事前に CFO については情報をたくさん得ていた。日本にやってくるフィリピン人、とりわけフィリピン人女性が抱える問題は、春日丘中学校でのボランティアを通して知っていた。しかし、実際に CFO に出向いて彼女たちと直に話してみると、彼女たちは日本に来てからの生活についてほぼノープランでやってくるということに驚いた。住む場所を尋ねれば都道府県程度、仕事は見つけられていない、といったような状態だった。かといって日本語が喋れるわけでもなく、彼女たちの楽観主義には危うさを感じた。

日本の生活や文化についてのプレゼンテーションは、日本にはじめてくる人から何度も来たことがある人まで、さまざまなグループに対し行ったので、それぞれの反応も違い、毎回新鮮な気持ちで挑むことになった。日本で外国人が生き抜いていく際に、何が最も必要なのかを考えさせられる機会でもあった。彼らが地域で孤立しないことが大変重要であり、そのためには、彼らが日本の文化や地域社会を理解する努力が必要になる。今回のプレゼンテーションがその一助となればと思うと同時に、受け入れ国である日本の人々の間にも、もっと移民者に対する理解や歩み寄りがあってもよいのではないかと感じた。

毎日たくさんの人々が CFO にやってきて、カウンセリングやセミナーを受けている姿を見ると、フィリピンにおける移民は国を担う一つの「産業」であることがよくわかった。また、街中で行商や何をするでもなくただずむ人の多さが、いかに国内での働き口が少ないかを示していた。短絡的に考えれば、もっと国内で働き口を増やすような政策をとればいいのに、と思う。フィリピンについてすぐの頃はそういう印象を持っていた。だが、CFO の職員の方々の取り組みを間近で見、そして自分たちがプレゼンテーションを通しその取り組みに参加する中で、別の考えが思い浮かぶようになった。今の

「産業」としての移民は、偽装結婚や人身売買のような問題を抱えている。しかし、もっと制度が整備され、移民が確実に安全なものとして確立されれば、移民はフィリピンにとって誇るべき産業になり得るのではないだろうか。労働力の過不足を調整することはごく自然なことであり、少子高齢化により労働力の枯渇が必至となっている日本にとっても非常に有利なことである。私たちの活動が、日本とフィリピンの関係をよりよいものとするにつながればと思う。